



ひのと賞

『ぼくらの七日間戦争』 宗田 理

経済学部経済学科 1年

中村 仁風

この本の内容を一言でいうと「子どもが大人たちに反抗する物語」です。

夏休み前の終業式の日突然男子生徒のほとんどが家に帰ってこずに親や教師がさがしはじめることから始まります。この時、男子生徒たちは、廃工場に集合しており、多少のトラブルが起きたりするが廃工場に立てこもり親や教師に宣戦布告します。そのことを聞いた大人たちは、廃工場から出てくるように説得を試みたり、廃工場へ強制侵入しようとするがとことん生徒たちにかからわれたり、防がれたりしてうまくいかない。このような大人と子どもの七日間に及ぶ「戦争」についてかかれています。

そしてこの本のテーマとなるのは、「大人への反抗」と「子供だけの世界」です。

大人に黙って廃工場に立てこもることや大人の説得を聞かないことなどが大人が子供に対する義務と子供の権利の矛盾を指摘しています。子供の権利が大人の義務により権利を使えない、使わないことをできないことです。だから、子どもの権利が大人の義務にかかわらず自らの権利の主張と行使を行うことで大人たちからの強制に対して反抗しているのです。

次に、生徒の廃工場での七日間の生活はもちろんのこと、七日間で起きた様々な事件を解決しようとしたりなど大人のいない世界の非日常感を味わっている様子が年相応の子どもらしく未熟な部分も多くあります。しかし、そこをそれぞれが補い合って乗り越えていくのです。

さて、この二つのテーマには、共通点があります。それは、「読者が子供のころに考えていたこと、子供が考えていること」だということです。子供のころに夢見たこと、今考えていることだからこそ自らと重ね合わせて読むことができ、物語に引きずり込まれてしまう。このことがこの本の最大の魅力です。

最後にこの本は、子供が読めば自由な想像を持つきっかけとなり、大人が読めば子供の頃に考えたことを思い出しながらもしそれが実現していたらと考えるきっかけをもらえる一冊となっています。

